第四講　論理的文章の読解③

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの㈠～㈧に答えなさい。

太古、人類は頭で「知る」ということを、まずはものを目で「見る」ことと同一視していたと考えられる。いまでは知ることは耳で聞くこと、手で触れること、さらには行動で関わる（かか）ことによっても可能だとわかっているが、最初の知的認識はとくに視覚の働きから誕生したと推察することができる。1示唆深いのは、古代ギリシャでは真の知の対象はイデアとかエイドスとか呼ばれていたが、どちらも語源的には目で見ること、ものの形という言葉と同根だったということである。おそらくさらに古く、古代メソポタミアやエジプトや黄河2リュウイキの昔から、この事情は同じだったにちがいない。なぜなら知的な認識は知る［　］と知られる客体が向かい合い、［　］が客体に距離を置いて、見渡したり分解したり総合したりする仕事であるが、これはすぐれて視覚のおこなう営みに3ニているからである。

そしてさらにいえば、そうした最初の知的認識を生んだ目の活動は、ほかならぬあの天空を見ることから始まったと考えてよいだろう。もちろん古代人の見るものには山も川も森も、日常の道具や収穫物もあったにちがいないが、それらはすべて視覚以外の感覚にも訴えかける存在であった。ただひとつあの大空の遠い姿だけが、日月星辰（じつげつせいしん）の形と運行だけが、手で触れることも足で分け入ることもできないままに、視覚に4鮮烈な印象を与えてくる存在であった。その天上の無限の彼方（かなた）を仰ぎ見ることによって、古代人は現実には感じられないが現実よりも、確実な存在があること、のちにイデアやエイドスと呼ばれた本質的な存在があることを、史上初めて予感する端緒を得たとすら想像できるのである。

さらに天空の観察は人類に心の内の想像力という能力に気づかせ、その働きを飛躍的に発展させることを教えたであろう。ちなみにここでいう想像力とは夢想や幻想の力ではなく、あらゆる現実についてそれを認識の対象として統一する能力をさしている。外から与えら

れる無数の感覚刺激を形にまとめ、それに個物としての名前を与える準備をする力を意味している。たとえば球体を見てそれを丸い輪郭線で描いたとすると、球面上にはそんな輪郭線などどこにもないのだから、これは見る人の想像力の5産物だということになる。その意味で、想像力は人間があらゆる現実を認識するための基礎的な能力なのである。

だが、地上にある対象の場合は、それを確かめるために人間は別の感覚能力の助けを借りることができる。先の球体についていえば、その表面を指で撫(な)でてそれが連続する球面であることを確認することができる。そしてこの連続性の知覚を頼りにすれば、同じく連続的な輪郭線を思いつくことは容易になるはずである。ところが天空に6チる星くずが対象となると、与えられているのは光の点ばかりであって、連続する線というものを見る助けはない。思うだに驚くべきことだが、古代人はあの星くずを見てその間を想像上の線でつなぎ、白鳥や大熊(おおぐま)や神話の中の英雄など、おびただしい星座の絵を描いたのである。

そのときから数千年、人類はいまだに星座という架空の形態を手がかりにして、時間ごとに7ウツり変わる星の位置を見定めている。もっと重要なことだが、その星の位置を座標として人間は自己の位置を確認している。このことは砂漠の旅人や大洋の航海者を助けただけでなく、空想を逞(たくま)しくすれば、風景の中の相対的なものの位置とは別に、無限空間のなかの絶対的な位置という観念がありうることを、人類に教えたかもしれない。

（山崎正和(やまざきまさかず)「大停滞の時代を超えて」より）

（注）イデア・エイドス＝どちらもギリシャ語で「姿・形」の意。哲学では、「存在の本質」を表す。
日月星辰＝太陽と月と星。

㈠　文章中の～～～部1～7について、漢字は読み仮名を書き、片仮名は漢字に改めなさい。

1　示唆

2　リュウイキ

3　ニて

4　鮮烈

5　産物

6　チる

7　ウツり

㈡　文章中の□には、いずれも「客体」の対義語が入る。「客体」の対義語を、漢字で答えなさい。

㈢　「端緒」と同じ意味を表す語を、文章中から四字で書き抜きなさい。

㈣「想像力という能力」とあるが、筆者はこれをどのような能力と考えているか。最も適切なものを、次の1～4から選び、記号で答えなさい。

1　あらゆる現実について、言葉で表現すると同時に、外界からの無数の感覚刺激を基に、夢想したり幻想したりする能力。
2　あらゆる現実について、言葉で表現する前段階で、外界からの無数の感覚刺激を認識の対象として一つにまとめる能力。
3　あらゆる現実について、言葉で表現した後に、外界からの無数の感覚刺激を的確に表現し得たかどうか分析する能力。
4　あらゆる現実について、言葉で表現した上で、外界からの無数の感覚刺激をどの程度まで統合できたか検証する能力。

□

㈤「これ」の指し示す内容を、文章中から五字で書き抜きなさい。

□□□□□

㈥「驚くべきことだが」とあるが、筆者が「驚くべきこと」と述べているのはなぜか。次の文がその理由を説明したものとなるように、［A］には四字の表現を、［B］には五字の表現を、それぞれ文章中から書き抜きなさい。

古代人は、［A］の感覚能力の助けを借りることなく、連続する［B］を用いて天空の星くずを結び付け、たくさんの星座の絵を描いたから。

A □□□□

B □□□□□

(七)　「砂漠の旅人や大洋の航海者」とあるが、この「砂漠の旅人や大洋の航海者」が置かれていた状況はどのような状況か。文章中の表現を用いて二十五字以内で説明しなさい。

(八)　前の文章で述べられている筆者の考えと合うものを、次の1～4から一つ選び、記号で答えなさい。

1　手で触れ、耳で聞くことで、古代人は、現実よりも確実な存在があることを初めて実感した。
2　天空という触れることのできないものの存在は、古代人にとって、恐怖の対象であった。
3　天空を仰ぎ見ることは、古代人が最初の知的認識能力を身に付けることにつながった。
4　古代人は、自らの足で自然の中に分け入り行動することと、知ることとを同一視した。

【山口県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

　現代は機械の精緻さが飛躍的に高まり、従来の単純反復労働を極限まで肩代わりする時代だが、そうなると人間の肉体労働も質的に変化せざるをえない。すでに徴候の見える事態だが、①<u>もの造りは大きく二つに分かれ</u>、それぞれ過去の単純反復労働から訣別（けつべつ）することになるだろう。一つはいうまでもなく余暇時間を埋めるホビーとしての手仕事、もう一つ重要なのは知的活動の延長としてなされる手仕事、すなわち設計図の立体化というべき試作品を造る仕事である。

　ホビーとしての手仕事は多岐にわたるが、木工、金工、料理、裁縫、機械製作にいたるまで、どれをとっても作品はつねに一品製作に終わり、しかもその一品の完成が最終目的とされるのが通常である。いいかえれば作業は目的と手段の無限連鎖から離れ、その過程それ自体が目的とされていることは明らかである。［②］作品には質的な高さが要求され、作業は苦しい緊張を③<u>強いられる</u>が、それは芸術制作の場合も同様であり、［④］この緊張が現在の充実をもたらしていると考えられる。現に多くの芸術活動そのものが素人（しろうと）によってホビーとして愉（たの）しまれているが、これはホビーの本質を裏側から証明するものだろう。

　これにたいして工業生産の一環としておこなわれる試作品の生産は、産業全体の流れのなかでは当然、目的・手段の長い連鎖に組みこまれている。だがこのことは科学研究を含むすべての知的活動にあてはまることであって、目を向けるべきはその営みの内部構造だろう。そして試作品製作を内部から見れば、これがほかならぬ一品製作であり、その完成が一連の知的活動の終着点であることに疑いの余地はない。試作品は表面的には設計図の立体化を目的とするように見えるが、本質的には逆に試作品が設計の正しさを検証するのであって、目的が手段によって修正を迫られることも少なくない。ここでも明白に⑤<u>時間の意味的な逆転</u>が促され、現在は完結した経過として充実を見せるのである。

　こうして多くの実用的な日常行動が芸術に似た時間構造を示すなかで、本来の近代芸術もまた若干の変質を蒙（こうむ）りながらも生き延びてゆくだろう。ここでは（注）ステントのいう進歩は他の知的分野よりも大きな停滞を見せ、その代わりにジャンルの多様化がＡ<u>サイ</u>限もなく進む

だろう。ステントによれば芸術の進歩とは同一性の範囲内の変化のことであり、鑑賞者の予想が⑥満たされるかぎりでの意外性のことであった。だが彼も指摘する通り、現代の先端的な芸術家は個性の発揮を競うあまり、ジャンルの同一性を破るような変化、鑑賞者の予想を裏切るほどの意外性を追い求めたのであった。生みだされるのが進歩ではなく、進歩を計る尺度そのものの変更だったために、進歩は原理的に停滞を余儀なくされた。

　これは私の定義によれば現在の充実の感覚そのものが多様化され、時間の逆転の仕方が普遍性を失ったということだが、しかしそれにもかかわらず、芸術が現在の完結の営みだという本質が変わったことを意味しない。むしろ今後、芸術は［⑦］の分野でますます広く愛好され、そのことによってジャンルの無限の多様化にも一定の歯止めがかかるかもしれない。大衆化は芸術のジャンルをも人気Ｂトウ票にかけることになり、親しみやすさを基準とした（注）淘汰（とうた）がおこなわれる可能性があるからである。ちなみに芸術のホビー化は万人を鑑賞者から素人芸術家に変え、結果として職業芸術家の存続を危うくする恐れもあるが、それへの対処は職業芸術家の自己努力にかかることであり、文明の危機とは無関係の問題だろう。

　それにしても⑧現代人が現在の完結と充実をいかに熱烈に求めているかは、観（み）る娯楽としてのスポーツの興隆に現れている。人気の野球やサッカーや格闘技のように、対抗試合形式のスポーツがドラマにも似た起伏を見せ、試合ごとに完結した現在をかたちづくるのはいうまでもない。面白いのは記録を争う陸上、水上の競技でさえ、歴史的な記録を競うばかりではなく、各種の競技会を開いてそのなかで勝負を決することである。生理的身体という限界を課されたスポーツの場合、歴史的な記録に永久の進歩がありえない反面、大会ごとの勝負ではその時点における現在の完結を見ることができる。現代人はそうした名勝負に喝采を送り、さながら古代人が舞踊に感じた充実を享受している。なにしろ世界の大多数の新聞において、今やスポーツ欄のページ数は政治欄のそれを抜いたというのである。

　最後にあらためて強調したいのは、（注）知識基盤社会は人間関係のうえでは社交が鍵となる社会であり、人びとが互いに顔の見えるつながりを回復する社会だということである。

　知的活動は宿命的に孤独な営みであり、偶然の「湧きあがり」によって動かされる仕事だが、そうであればこそ人は互いに有ＣエキなBR刺激を受けやすい環境を不可欠とする。そしてそういう環境は階Ｄソウ構造の固定した「組織」のなかにもなく、まして顔の見えない（注）茫漠（ぼうばく）たる大衆社会のなかにもありえない。それは相互に尊敬しあえる他者によって評価を受け、個人の独立を保ちながら刺激を与えあ

う人間関係、ほかならぬ社交の交遊のなかにしか期待できないはずなのである。

そしてこの社交の交遊それ自体がまた、じつは現存という時間の充実、完結した行動の成就（じょうじゅ）というかたちを必要としていることを忘れてはなるまい。もちろん社交は長い時間の継続を基盤とするが、そのうえに立ってそれはときに緊張したサロン(注)の昂揚（こうよう）を欠くことができない。かつて日本の茶道の世界に、「一期一会（いちごいちえ）」という戒めがあったことを思いだしてもよい。一夕の気品ある宴席にせよ、囲碁や将棋を楽しむ午後にせよ、数時間の潑溂（はつらつ）と緊迫した研究会にもせよ、滑らかに流れつつも構造を持った時間の共有が人の心を結ぶのである。そういう現在の充実をおりに触れて味わうことが、じつは明日のない無常の世を生きるよすがとなることは、茶の湯が戦乱の時代にこそ栄えたことを思ってもうなずけるだろう。

（山崎正和（やまざきまさかず）「世界文明史の試み」より）

（注）ステント――アメリカの生物学者。
淘汰――条件に合わないものを取り除くこと。
知識基盤社会――知的活動があらゆる領域の活動を支える社会。
茫漠――ぼんやりして、つかみどころのないさま。
サロン――芸術家などの社交的な集まり。

Step 2

問一　二重傍線部A～Dの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

A　ア　サイ心の注意を払う。　イ　無病息サイを願う。
　　ウ　サイ算がとれない。　エ　卒業後も交サイが続く。

B　ア　単トウ直入に尋ねる。　イ　意気トウ合して語り明かす。
　　ウ　対策を検トウする。　エ　会員としてトウ録する。

C　ア　趣味と実エキを兼ねる。　イ　エキ晶テレビを視聴する。
　　ウ　不エキと流行。　エ　エキ伝で優勝する。

D　ア　準備に奔ソウする。　イ　ソウ意工夫を凝らす。
　　ウ　石油を輸ソウする。　エ　深ソウ心理がわかる。

Step 2

問二　傍線部③・⑥に含まれている動詞の終止形を書きなさい。

A

B

C

D

③

⑥

Step 2

問三　傍線部①について、「もの造り」は何と何に分かれるというのか。本文中からそれぞれ八字以上十字以内で抜き出して書きなさい。

Step 3

問四　空欄②・④に入ることばの組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　②　たとえ　④　さらに
イ　②　たしかに　④　なぜなら
ウ　②　もちろん　④　むしろ
エ　②　すなわち　④　まして

Step 3

問五　傍線部⑤について、「もの造り」における「時間の意味的な逆転」を説明した次の文の空欄に入る最も適切なことばを、a・bは【A群】のア～エから、cは【B群】のオ～クからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

従来の単純反復労働によるもの造りにおいては、［a］は［b］を達成するためのものだったが、現代のもの造りにおいては［c］ということ。

【A群】

ア　a　作業過程という手段　　b　完成という目的
イ　a　知的活動という手段　　b　作業過程という目的
ウ　a　完成という目的　　b　作業過程という手段
エ　a　作業過程という目的　　b　知的活動という手段

【B群】

オ　達成された目的が次の目的を達成するための手段となり、それが繰り返されるようになる
カ　手段が目的から切り離され、目的に到達するまでの見通しを立てることが困難になる
キ　手段そのものの価値が高まり、手段が目的となることや、手段によって目的が見直されることがある
ク　目的と手段が入れ替わり、手段そのものが重要視され、目的を達成することには価値がなくなる

a・b［　］

c［　］

Step 3

問六　空欄⑦に入る適切なことばを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　鑑賞　　イ　産業　　ウ　職業芸術　　エ　ホビー

Step 3

問七　傍線部⑧について、「現在の完結と充実」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　もの造りにおける一つの作品の製作と同様に、スポーツにおいても試合や競技会ごとに勝負を決するまでの時間が、変化に富んだ展開により、観る者にとって充実したものになるということ。

イ　芸術のジャンルの多様化と同様に、スポーツにおいても様々な種目で競技者が個性を発揮することで、再現することのできない充実した勝負が繰り広げられ、大衆を熱狂させるということ。

ウ　芸術の大衆化と同様に、スポーツが観る娯楽として大衆に親しまれるようになった結果、歴史的な記録よりも人気に左右されるようになり、かえってそれぞれの大会が充実を見せるということ。

エ　もの造りにおける作業と同様に、スポーツにおいても大会に至るまでの過程が重要な意味を持つようになり、観る者の予想を裏切るドラマのような名勝負が、観る者に充実をもたらすということ。

Step 3

問八　本文に述べられている内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　現代社会では他者との心の結びつきが失われてしまったので、顔の見える人間関係を回復させるために、茶の湯などの伝統的な交遊の場が必要である。

イ　知的活動は偶然が影響する孤独な営みであるからこそ、互いに尊敬しあい刺激を与えあう人間関係の中で、充実した時間を共有することが求められる。

ウ　現代では顔の見えない大衆社会の中に個性が埋もれてしまっているので、知的活動を充実させ、個人としての独立を保つことが求められる。

エ　現代の人間関係は緊張を強いられることが多いため、囲碁や将棋など仕事以外の場における顔の見える交流を通じて、余暇時間を充実させる必要がある。

□

【兵庫県】

〈Note〉

第四講　論理的文章の読解③

Step 1

一

解答

(一) 1、しさ　2、流域　3、似(て)　4、せんれつ　5、さんぶつ　6、散(る)　7、移(り)　(二) 主体　(三) 手がかり　(四) 2　(五) 丸い輪郭線　(六) A、視覚以外　B、想像上の線　(七) 星の位置で自己の位置を確認せざるを得ない状況。(23字)(同意可)　(八) 3

解説

(二)「客体」は、人が認識する対象になるものを意味する。その対義語は、「客体」を認識するその人自身を表す語である。

(三)「端緒」は、ものごとのはじまり、ものごとを判断するいとぐち、という意味。人類が現在も、星の位置を見定めるために「星座という架空の形態」を利用していることに着目する。

(四)「ここでいう想像力」は、「夢想や幻想の力」ではなく、「あらゆる現実について…統一する能力」であり、「外から与えられる無数の感覚刺激を…準備をする力」であると述べている。

(五) 球体を描く線で、現実にはない線を指している。

(六) 古代人が「あの星くずを見てその間を想像上の線でつなぎ…おびただしい星座の絵を描いた」ということを、「驚くべきこと」としている。それが驚くべきことだという理由については、「地上にある対象」のように「別の感覚能力の助けを借りる」ことをしないで、星座の絵を描いたからとしている。Aには、「見る」という感覚能力ではない「別の感覚能力」を表す言葉が入る。Bには、星座の絵を描いた線を表す言葉が入る。

(七) 地上や洋上に目印が何もないという状態で、位置を確認する方法を考える。

(八)「最初の知的認識を生んだ目の活動は、ほかならぬあの天空を見ることから始まったと考えてよいだろう」と述べている。

Step 2・3

二

解答

問一、A、エ　B、イ　C、ア　D、エ　問二、③強いる　⑥満たす　問三、ホビーとしての手仕事・試作品を造る仕事　問四、ウ
問五、a・b、ア　c、キ　問六、エ　問七、ア　問八、イ

解説

問一、A、「際」と書く。アは「細」、イは「災」、ウは「採」。B、「投」と書く。アは「刀」、ウは「討」、エは「登」。C、「益」と書く。イは「液」、ウは「易」、エは「駅」。D、「層」と書く。アは「走」、イは「創」、ウは「送」。

問二、動詞の終止形は最後がウ段の音になる。③に含まれている動詞は「強い」。⑥に含まれている動詞は「満たさ」。

問三、「一つは…ホビーとしての手仕事」「もう一つ重要なのは知的活動の延長としてなされる手仕事」とあり、あとの仕事は「すなわち…」ということばを使って言い換えられている。

問四、②には言うまでもなく、まちがいなくという意味のことばが入る。④には「緊張が現在の充実をもたらしている」ことを強調することばが入る。

問五、a・b、従来のもの造りでは、試作品の「完成が一連の知的活動の終着点である」としている。ここでの知的活動とは、作業過程を表している。c、現代のもの造りでは「試作品が設計の…目的が手段によって修正を迫られることも少なくない」とある。

問六、あとに「芸術は…愛好され」ることを、「芸術のホビー化」と表していることをおさえる。

問七、もの造りが愛好されることを、スポーツの興隆にたとえ、現代のスポーツでは試合が「ドラマにも似た起伏を見せ、試合ごとに完結した現在をかたちづくる」ことに着目する。また、大会ごとの勝負では「その時点における現在の完結」を見ることができ、名勝負に「充実」を感じているとある。

問八、「知的活動は宿命的に孤独な営み」であり、だからこそ「人は互いに有エキな刺激を受けやすい環境」、つまり、「相互に尊敬しあえる他者によって…刺激を与えあう人間関係」が必要だと述べている。